伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会

対話・つながり・実現の場

第９回　開催報告

まちなか作戦会議～「やりたい」が「つながり」で動き出す～

2026.3.1

開催報告

テーマ

まちなか作戦会議～「やりたい」が「つながり」で動き出す～

開催概要

〇日時　　：2026年3月1日（日）13:00-16:00
〇開催場所　：伊那市生涯学習センター
　　いなっせ ５Ｆ 501～503会議室
〇参加者　　：約50人（一般参加：約35人、協議会メンバー、市職員、関係者：約15人）

プログラム

まちづくりの専門家からお話を聴き、まちづくりの実践例を学び、まちなかエリアでの「やりたい」を実現するためのヒントを得て、対話を通して次の一歩を踏み出すきっかけの場とする。

１．これまでの振り返り・趣旨説明
２．キーノートスピーチ１
　園田 聡 さん／博士（工学）／（有）ハートビートプラン 代表取締役
３．キーノートスピーチ２
　新 雄太 さん／博士（工学）／東京大学まちづくり研究室 特任助教
４．トークセッション
　園田 聡 さん × 新 雄太 さん × 政金 裕太 さん（ファシリテーター・信州大学研究員）
５．グループディスカッション
　「やりたい」をブラッシュアップしてグループごとにまとめる。

キーノートスピーチ１　園田 聡 氏

園田 聡 氏／博士（工学）

(有)ハートビートプラン 代表取締役
松本城三の丸エリアプラットフォーム事務局
専門分野：都市デザイン、プレイスメイキング

・２年前に松本市に移住
・(有)ハートビートプランでは、共有資産である公共空間への投資、活用による「まちが面白くなること」をサポートしている。
・(有)ハートビートプランのコンセプトは「わたしの『やりたい』がだれかの『楽しい』になるまちづくり」

【総論：プレイスメイキングの重要性】

・まちでの活動には、通勤などの「必要活動」に加え、散歩などの「任意活動」や誰かと過ごす「社会活動」がある。
・「任意活動」や「社会活動」を発生させるには、快適な場所、許容されるルール、カフェのようなサービスが必要である。
・従来の公共空間は物理的な整備が先行し、最大公約数的で中途半端なものになりがちであった。
・「サードプレイス」を企業コンセプトとしているスターバックスのように、居心地の良い愛される場所を作るには、「そこでどんな活動をしたいか」という目的と、それを実現する「形や仕組み」をセットで考える必要がある。
・まちづくりにおいて、住民や行政、専門家がどのように話し合い、役割分担をして空間を形にしていくか。そのプロセス全体をデザインする「プレイスメイキング」が重要である。

キーノートスピーチ１　園田 聡 氏

【松本城三のエリアプラットフォームの事例】

●ビジョン策定「徹底した対話と危機感の共有」

・松本城三の丸エリアを10の小さな界隈に分け、住民が「自分事」として語れる単位とした。
・ビジョン策定にあたっては、具体的な思いを持つ「テーマ型コミュニティ」を中心に、半年間で約170人に500回ものヒアリングを実施。同時に市役所内の約20部署とも連携を図った。
・大きな転機となったのは、小中高生へのアンケートで「お気に入りの場所圧倒的1位がイオンモール」だったこと。この結果に大人たちは「子どもたちが誇れるまちにしなければ」と強い危機感を抱き団結した。
・みんなのまちづくりへの思いを束ねて、多様な選択肢や顔が見える繋がりを大切にする「誰かに語りたくなる暮らし」というビジョンを掲げた。

●体制づくりと実証実験「民間主導と行政のサポート」

・ビジョン実現のため、民間事業者によるエリアプラットフォームを設立。市役所はたらい回しを防ぐために窓口を一本化し、規制緩和や公共投資など行政ならではの役割を担った。
・その後、女鳥羽川橋の上でのマーケットや、個人商店を繋ぐ「まちのフードコート」、ガソリンスタンド跡地を活用したチャレンジショップなどビジョンを形にする実証実験を実施した。この際、(有)ハートビートプランと行政は、許可申請や契約手続きなどで活動をサポートした。

●成果と波及効果「仮説検証から本格的な投資へ」

・これらの実験は「まちに出て多様な人と出会うか」といった指標で定量的に効果を検証した。
・2年間で10の界隈のうち実際に活動が動き出したのは7つであったが、自発的な活動が同時多発的に発生している。
・現在では、行政による道路や河川の改修、民間企業による数億円規模の投資（跡地への新築）へと発展している。
・やりたいことが実現でき、それを続けるために必要なものは公共も民間も投資するという形ができてきている。

【まとめ：みんなでつくる豊かな暮らし】

・これからのまちづくりは、行政や企業が「サービスを提供」し、市民が「消費」するという分断された関係では持続しない。市民自身が「こんな場所が欲しい」と声を上げ、提供者側と一緒になってまちをつくっていく共創の姿勢が重要である。
・最初から100%の成功を求めず、仮説を立てて実験し修正していく「おおらかな気持ち」で取り組むことが肝心である。
・一人ひとりの「やりたい」が実現し、多様な世代の居場所ができることで、「伊那市に住んでいることが豊かな暮らしだ」と実感できるようになる。
・官民が連携し、個人の声からまちのシーンを作っていくことが、人口減少下でも愛され続けるまちづくりの鍵となる。

キーノートスピーチ２　新 雄太 氏

新 雄太 氏／博士（工学）

東京大学まちづくり研究室 特任助教
UDC信州アドバイザー
専門分野：建築・都市計画、コミュニティデザイン

・長野市在住
・元々建築設計を仕事にしていたが、研究者に転身
・研究者として県内で様々な調査研究を実施、現在も大町市、小布施町など県内７地域で調査研究をおこなっている。

【課題：地方都市で起きていること】

・日本の人口減少は、少ない人口で広大な土地を利用していた150年前の姿に戻る過程とも言える。
・現在、地方都市では行政、コミュニティ、民間が共に疲弊し、生活支援の需要が増える一方で提供機能が低下する「暮らしのミスマッチ」が起きている。
・さらに深刻なのは、「心の空洞化」、「心の過疎化」と言われる「主体性の欠如」による「人口の質の低下」である。
・まちづくりへの疲れが諦めを生み、人口の「量」と「質」の低下という二重苦が全国で起きている。
・解決策として移住者に期待が寄せられるが、自己実現を求める移住者と地域の担い手を求める地元との間で摩擦が生じがちである。この状況下でどう地域を再構築していくか、誰にもわからない。

キーノートスピーチ２　新 雄太 氏

【奈良井宿事例：思い込みを打破する個人アンケートと「等話（とうわ）」】

・伝統的なまち並みが残る奈良井宿では、人口減少と空き家の増加、観光と生活のジレンマという課題を抱えている。
・従来の年配の男性中心の議論から脱却するため、中学生以上の全住民を対象に、世帯ではなく「個人単位」でのアンケートを実施（回収率約90%）した。
・アンケートの結果、「若者は伝統を変えたがっている」「女性は祭りの負担を嫌がっている」という年配の男性たちのイメージとは異なり、「若者は伝統を深く理解した上で判断したい」「祭りの見直しを求めているのは男性の方が多い」という実態がデータで明らかになった。
・この客観的データをもとに、誰もが平等に話せる「等話（ワールドカフェ形式）」を開催。意思決定を急がずに対話を重ねるプロセスを経ることで、長年変わらなかった祭りに女性や外部の人が参加できるようになるなど、確かな変化が生まれた。
・昔の村長が残した「人がまち並みを作り、まち並みが人を作る」という言葉がある。 まち並みに関わることが人と人との繋がりを生み、観光と生活という地域のジレンマを乗り越える鍵となっている。

【善光寺門前事例：テクノロジーで「歩きたくなる空間」を可視化】

・善光寺門前では、民間主導で100棟以上の空き家リノベーションが進んでいる。
・ここではテクノロジーを用いたユニークな実証実験が行われた。スマートシューズで歩行スピードや滞留時間を測り「魅力的な通りは滞留時間が長い」ことをデータで実証。また、自転車に付けたカメラ映像を解析してまちなかの「緑の不足」を可視化し、参道に木陰を作る具体的な提案も出てきている。

【小布施町事例：「関係人口」から共に作る「共創人口」へ】

・小布施町では、町をキャンパスに地域外の人々と共に地域課題を解決する「ミライ構想カレッジ」を実施している。
・人口１万人の町に継続的に多くの人々がやってきて、小布施町の可能性を語らい、試し、プロトタイプを作る。消費的な関わりになりがちな「関係人口」ではなく、自ら作り手となる「共創人口」を生み出す試みである。

【まとめ：共創のまちづくりに必要なこと】

・共創のまちづくりには「多様な主体の参加」「ビジョンの共有」「実践の連鎖」「個人の成長」「相互学習」の5要素が重要となる。
・20世紀型のトップダウンという1つの矢印ではなく、一人ひとりの「私」の小さな思いや「やりたい」という無数の矢印の群れ、流れをどう作っていくかが大切である。
・対話を通じて共感が集まり、「私たち」のチームへと育っていくプロセス自体に価値がある。
・伊那市の雑味を活かして、多様な思いが交差するまちづくりを進めていければよい。

トークセッション

Q1. 実際の空間でチャレンジする際、場所や内容はどのように決めていったか？（松本市の事例）

園田さん：

・松本市では、まず松本城三の丸エリアを「10の界隈」に分けた。境界線はあえてぼやかし、地元の方への聞き取りをベースに「このへん」という感覚的な単位で設定した。界隈が決まると、「あの場所を使いたい」という具体的な意見が出やすくなり、地権者も誰かわかっているため話がスムーズに進む。
・行政主導で「この場所をどう使いたいか」と聞くと、無理にひねり出したようなアイデアになりがちで、誰のためやっているのかわからなくなる。そのため、まずは界隈の方に「何をやりたいか」「何が必要か」をヒアリングする。
・もしその地域に適切な場所がなければ、「少し離れたあの公園や道路が使えるならどうですか？」と提案し、やりたいことと場所をマッチングさせていきた。
・行政には実証実験の際に特別な許可や規制緩和をお願いし、今までできなかったことを可能にすることで、前向きなコミュニケーションを生み出している。

Q2. ヒアリングの中で「やりたい」を持つ人を見つけるのは、よく使う手法か？

園田さん：

・私たちがどこでも使っている手法である。
・都市計画などは「あるべき論」が語られがちで、立派な計画ができても実現しないことが多々ある。大切なのは、最初から「自ら動く前提」で話してくれる人と一緒にビジョンを作ることである。
・ワークショップには事業者の方が多く参加している。移住者も老舗の方も、最終的に自分の本業や生業に良い形で返ってくるのであれば、リスクを取って本気で取り組んでくれる。
・思いがあっても自分で動けない方を排除するわけではない。「こういうことをやりたい人がいるので、応援してもらえませんか」と関わり方を提案している。
・ヒアリングでは、いきなりまちづくりの話はしない。なぜここで商売を始めたのか、ファミリーヒストリーなどをじっくり聞き、その中で「本当はやりたいけれど一人ではできないこと」を引き出し、「お手伝いできそうなら一緒にやりませんか」と持ちかけるようにしている。

トークセッション

Q3. アンケートなどで、定量データと定性データの使い分けについてどう考えているか？

新さん：

・奈良井宿の事例では「全住民に聞かないと本当のことはわからない」と考え、全数調査にこだわった。
・一人ひとりの声を拾い上げることは、定量・定性の両面で非常に重要である。個人の声（部分）を集めることで、初めて全体を俯瞰することができる。
・インタビューでは個別の深い思い（定性）を拾えるが、それを全体としてどう構造化するかに労力を割いている。
・私たちは意思決定者ではなく、集めたデータを示して「皆さん、全体を見てどう思いますか？」と話し合う場を作る役割に徹している。

Q4. 調査やヒアリングの後、具体的な「動き（矢印）」に繋がった事例を教えてほしい。

園田さん：

・松本市では、イベント的な取り組みのほか、地元の方が草刈りをしやすいように河川に飛び石を置いたり、まちのフードコートを作ったりといった動きがあった。重要なのは、プラットフォーム（事務局）が主催するのではなく、地元の方が3人以上のチームを作って提案する仕組みにしたことである。
・事務局は「やる・やらない」を判断せず、ビジョンに合致していれば以下の3つの支援を行った。
　１．技術的支援：行政や企業との間に入り、許可申請や規制緩和の交渉をサポート
　２．広報・データ支援：プロによるフライヤーデザイン、取組成果のデータ化、効果測定、フィードバック
　３．資金的支援：市から100%補助が出る仕組みの構築。
・これらは2年間限定の支援であり、その後は、例えば道路や河川整備であれば、それぞれの管理者に引き取ってもらい、市が予算化して本格的な整備に繋げるところまで伴走している。

新さん：

・「この人に任せたら面白い」という方を「一本釣り」することも大事だと思っている。例えば、空き家見学会を通じて参加者を観察し、適任者を探す取り組みもある。
・同じまちに住んでいても出会ったことのない人同士が、価値観を共有し、お互いの面白い活動を知って応援し合えるような「タッチポイント」を増やすことが重要である。

トークセッション

Q5. ヒアリングする際のポイントはどんなところか？

新さん：

・まちづくりでは、建前ではなく本音での対話が不可欠である。

園田さん：

・特に30～40代の現役世代が関わるには、単なるボランティアではなく、本業への好影響や、自身の子どもの生活環境が改善されるなど、自身の暮らしにメリットがある形での参加が求められる。

・(有)ハートビートプランはスキルを提供できるが、真の課題解決には「誰のため、何のため」という住民の本音が欠かせない。建前で進めても本音で思っていることは解決しない。

・また最後までやり抜くためには、地域のキーパーソンとなる利害関係者と本気で向き合うことは避けられない。

ファシリテーター政金裕太さん（信州大学研究員）

Q6. 界隈ごとで、住民や事業者の積極性に違いはあるか？

園田さん：

・違いはある。新しい仕組みなので、最初から全員が積極的になるのは不可能である。

・行政は単年度で成果を求めがちであるが、スケジュールありきではなく、まずは一歩踏み出した方を全力で応援することが大切である。その姿を他の人が見て、「うちもやりたい」と思ってもらう連鎖を待つ余裕が必要である。

・そのため、私たちは最低3年、基本5年単位での取組を提案している。

Q7. 奈良井宿のプロジェクトへの大学生の関わり方はどのようなものか？

新さん：

・4月に研究室でプロジェクト報告会を行い、参加したい学生を募る。基本的にはボランティアであるが、旅費は支給し、大学の単位も付与する形で、学生自身の学びや実践の場として関わってもらっている。

Q8. 松本市の取り組みは、伊那市の人口規模でも可能か？

園田さん：

・人口や経済の規模はあまり関係ない。伊那市より人口規模の小さい気仙沼市や人吉市でも良い動きは出ている。重要なのは、まち全体に拡散させるのではなく、特定のエリアに人口や経済の「密度」を集約するポイントを作ることである。行政が「このエリアに注力する」という5年、10年先のビジョンを明確に宣言することで、民間も安心して投資できるようになる。密度のある拠点ができれば、人口規模に関わらず取り組みは成り立つ。

トークセッション

Q9. 決まった人しかまちづくりに関わらない状況を打破し、多様な意見を引き出す工夫はあるか？

新さん：

・大町市では、高校生から高齢者まで約80人が参加し、2日間かけて1,500軒の建物を調べる「空き家調査」を行った。通常は専門家だけでやるが、市民が参加することで、まちの変化に気づく豊かな機会となった。調査プロセス自体をオープンにすることが、多様な関わりを生む工夫である。

園田さん：

・プロセスをオープンにし、アンケート結果も途中で共有しながら対話の場を設けている。ただし、地域の重鎮や決定権を持つ人には、最初から趣旨を説明し、毎月状況を報告して関係性を築くことが不可欠である。よそ者である私たちが矢面に立って調整することで、地元の人同士がぶつかるのを防ぐ役割も担っている。

Q10. 許可申請手続きやデザイン依頼などを当事者が行うことが力になると思うが、全てコンサルが代行しているのか？

園田さん：

・地元の方が自ら行うことが最も重要だと考えている。松本市でも、警察や消防への事前相談など、ベースとなる「地ならし」までは私たちが行なうが、最終的な説明や交渉は当事者に行ってもらっている。フライヤーのデザインも、費用は私たちが持つが、デザイナーとの打ち合わせは当事者が行っている。

・コンサルが全てやってしまうと、私たちが離れた瞬間に元に戻ってしまう。行政には行政のルールや立場があることを市民に理解してもらい、逆に行政には市民の立場を理解してもらう。その相互理解の手助けをするのが私たちの役割である。

グループディスカッション

Aグループ
「やりたい」
・自動的に情報が手に入る仕組み
　>情報をうまく取り込めず自分から探しに行かないといけない。
・農業系やIT系の交流スペース
　>既にある交流スペースもイベントがないと何もない状態が多い。
・通り町を緑道にする。
　>周囲を山に囲まれているので遠くに緑があるから身近には緑が
　　なくても良いという話もあったが…。

Bグループ
「やりたい」
・多世代の居場所、学生の拠点、飲食が楽しいエリアづくり
「気付き」
・大切なのは、アンケート調査やヒアリングでみんなの意見を聞くこと

Cグループ
「やりたい」
・空き地があったらとりあえず芝生化
　>居場所をつくるために低コストで着手できそうなこと
・自宅と周囲の境目を塀ではなくて生垣にすることに補助金を出す。
「気付き」
・こういった場に来ていない学生や市民の意見を吸い上げることが必要
・本当にやる気のある人を見つけることが重要

グループディスカッション

Dグループ

「やりたい」

・古い文化の発信
・里山づくり
・家具を作るような学びの場づくり
・「縁側」づくり
　>半公共で、通りかかった人が寄って、話ができて、情報が集まり、通りかかった人同士でやりたいことを話し合って背中を押してもらえるような空間＝「縁側」がまちなかにできたら、子どもから高齢者までにとって温かいまちになる。

「気付き」

・いろいろな矢印が集まって流れを作っている場所が魅力的になる。

Eグループ

「やりたい」

・セントラルパークを活用したビアガーデンやカフェ
・ニシザワ跡地にサロンをつくり、つながりの場、情報が入手できる場とする。
・高校生が参加しやすい場所づくり
・空き店舗を活用したチャレンジショップ

「気付き」

・話したことが形となるようなスモールステップを踏んでいくことが大切である。
・このような場に参加しない人の本音を引き出すことが必要である。
・チャレンジする経験を積み重ねていくことが大事である。

ラップアップコメント

【園田聡さんの視点：伊那ならではの空間と「大人が楽しむまち」】

- 伊那市のまちなかエリアをまち歩きをして案内していただいた。
- まち歩きを通じて、若い世代が空き物件をDIYで改装し店舗を営むといった「リアルな動き」がすでに起きていることを実感した。こうした実践者と丁寧に接点を持つことが重要である。
- これからのまちづくりでは、一般的な「駅中心」の考え方に縛られず、伊那市の現状に合った独自の形を模索すべきである。
- 車社会を否定するのではなく、一度車を停めたら「歩いて回った方が早い」と思える範囲に、複数の目的地が密集した空間づくりが鍵となる。
- また、車の運転ができない子どもたちが自転車等で集まれる「たまり場」と、大人が集う場所が重なるような空間設計ができるとよい。
- 日常の生活動線上にある空き地で試験的な取り組みを行えば、自然と人々の反応を得られる。
- 「大人が楽しそうにしている姿を子どもに見せること」が大切である。
- 親や教師以外の多様な大人と挨拶を交わし、大人がまちで楽しく過ごす姿を見ることで、子どもたちは将来に希望を持てると思う。
- 伊那市には、そんな豊かな教育環境をまちなかで実現できる十分なポテンシャルがある。

ラップアップコメント

【新雄太さんの視点：まちの魅力の再発見と「やりたい」を応援する仕組み】

- 伊那市のまちなかエリアをまち歩きをして案内していただいた。
- 伊那市のディープな魅力や川沿いの美しい散歩道に感銘を受けた。
- 特別な施策を打たずとも、まずは高校生や生活者が「日常的に歩いている場所」を再確認することも大切である。
- まちで挑戦を続ける人々や高校生自身が案内役となる「まち歩き」をやってみるのも面白い。そんな「まち歩き」に参加してみたい。
- 小布施町では、民地を緩やかに開放して交流を生む仕掛けがある。まちなかに増えつつある空き地を単なる駐車場にするのではなく、椅子や木陰を設けるだけでも立派な居場所になりえる。
- 伊那市には特有のユニークな「蔵」がたくさんある。隣接する空き地と一体的に活用するのは面白いと思う。
- 市民の「やりたい」を実現するため、既存の交付金などの支援策をもっと周知する必要がある。
- 横浜市の「まち普請事業」のように、市民の提案を公開審査してまち全体で盛り上げるような仕組みを伊那市でも導入し、個人の「やりたい」を堂々と表に出せる機会を作ることが今後の重要なステップになる。

【まとめ】

- お二人から、伊那市にはすでに魅力的な資源や実践する市民が存在しており、それらを繋ぎ合わせ、大人が本気で楽しみながら活動していくことが、次世代を育む豊かなまちづくりに直結するという力強いメッセージをいただいた。

アンケート結果

1　「作戦会議」の感想、印象に残った話など

・諏訪市から参加したが、こういった場に多くの方が集まる皆さんのやる気がすごいと思った。
・対象地域に住んでいる人たち全員にアンケートするというのが印象に残った。それにより今まで見えなかったものが見えてくるかもしれないと思った。
・「100%成功しなくてもよい」という考えで進めていくことも頭に置いておきたいと思った。
・とにかくヒアリングが大事だと感じた。昔から住んでいる人や新しい人（移住してきた人）の感じていることを聴き、まちがよい方向に進めばよいと思った。
・園田さんの話の中で、「イオンモールが来たから街が廃れたのではなく、たまたまイオンモールがその街に来た時に、"良い居場所"として最適だったのがイオンモールだった」といった話が印象的だった。
・居場所としてイオンモールが悪い訳ではなく、今まで"欲しい"と思っていてもその地域内に無かったから、"欲しい"が備わっているイオンモールが良い居場所として指示されるのは、確かに必然だと感じた。新しい視点でとても勉強になった。
・グループワーク後も各テーブルでも触れられていたが、新さんの話にあった「多様な矢印」という例えがとても分かりやすく、今まで感じていたモヤモヤが解消された気がした。
・長野県内の身近な事例から、松本市や長野市は改めてこんな楽しいことになっているのかと、とても楽しく話を伺うことができた。
・データの見せ方、結果としての出し方も納得感があり、自分の関わるフィールドでも必要なデータ取りと出し方をきっかけとして使っていければと感じた。
・自然に任せるのではなく、本気の人を見つけ出して一緒に伴走しながら動いていくということは、ワークショップ開催をおこなった時になかなかできていなかったことであり、是非見習っていきたい。
・また、車を使わない子ども世代にとってウォーカブルであることなど、世代や事情が違えば視点が変わることを「常に考えることの一つ」として持ちたいと思った。
・松本城三の丸エリア、奈良井宿などの事例を興味深く聞いた。共感ができる仕組み（界隈単位のイラスト、個人ごとのアンケートのフィードバック）などが非常に参考になった。
・松本市にも住んでいたことがあり、裏事情を知れて面白かった。
・住民全員へのアンケート、個別のヒアリングなど大変な作業であるが、実施していることにビックリした。
・やる気のある人を探すのは難しい。
・意見交換の時間が少ない。主催者には時間配分を再考してほしい。

アンケート結果

2　「作戦会議」をヒントに、「伊那市ではこんなことに活かせそう」ということ

・地域にある、色々な矢印、カオスを感じる機会があったらよいと思う。
・本当にやるかどうかは別として、「やりたい」という物事、理想や思い描くプランなどをただ口に出し、想いのある人同士、又は「やりたい」が無くても興味が少しでもある人と共有し合える場が欲しい。既にあるのならば、そういった場に参加したい。
・借景での森林割合が多いというのは長野県全体に共通する要素かと思うが、「森といきる　伊那市」には、inadani seesもあり森林施策が進んでいるので、是非ワクワクする形でまちなかに自然を活かしていけると面白いと感じた。
・セントラルパークの新たなポテンシャルが見えてきた。
・ふらりと立ち寄れるオープンスペース
・みはらしファームをもっと楽しくするには？
・情報発信の重要性を再認識した。住民それぞれが思っていることがあっても伝わってこない。どんどんSNS等を活用できたらと思う。
・やる気が最初からある人は少ない。キッカケが必要である。
・「対話・つながり・実現の場」の企画主催が毎回バラバラであり、行政の縦割の弊害を強く感じた。

3　まちづくりであなたが「やりたい」こと、「やりたい」を実現するために必要だと思うこと

・とにかくやってみることが大事だと思った。民間などがやりたいことを後ろから押してあげる（手助けできる）ような体制を目指してみたい。
・きっかけとなる「場」を形成し続けること、「場」で本気の仲間をつくること
・公務員はどうしても一歩引いた態度で臨みがちではあるが、本気で向かい合うことが求められるとを改めて今回感じた。
・セントラルパーク20周年イベント
・仲間づくり
・マルシェに出店したい。
・スマートシューズに加速度センサーをつけて動いてもらうデータ収集方法の実践
・やった先に姿が見えることや成果が見えること
・単に箱物を作ったりして、ランニングコストを考えない開発は10年20年後に禍根を残す。あるものを有効に使うべき。
・学童クラブの子どもに基礎学力をつけて令和の「進徳館」を!！

アンケート結果

4　まちづくりに関してお話を聴いてみたい講師の方（分野や具体的な講師の方のお名前）

・近自然学工学の分野で佐藤浩行さんからまちづくり分野のお話を聴きたい。
・コミュニティデザイン
・「まちづくり」に成功したとされる元塩尻市長小口氏、塩尻市都市計画課職員の方

5　参加してみたい「対話」テーマやまちづくりの取組、その他ご意見、ご感想

・移住者が自治会に入らず、雪かきなどをしてくれないという話もとても興味深かった。様々な人が各々の「やりたい」を実現する一方で、その企画や事業を行う人が「その地に何年も住んでおり、自治会に参加したり、地域の人々･組織との関わりが必要最低限でもある人」ではなく、「移住者や、商売をする場としてしか地域との関わりがない、外から来た人」であった場合の、その地域や住民と「やりたい」を実現する人との関わり方に関して考えることができる場があったら嬉しい。今までとは毛色が違う話題だが、「やりたい」は尊重されるべきであり、まちの活気の為に必要だからこそ、その地域や住民の想いと、「やりたい」のぶつかり合いに関する対話をしてみたい。
・伊那市で増えている関係人口による対話が開かれるのであれば、是非参加してみたい。
・セントラルパーク、通り町などの活用方法
・「やりたい」を実現するには、実際どんな問題があるか。
・経験を活かして子どもの学力向上に無償で関わりたい。

WGメンバーコメント

<黒河内 貴 氏>

・園田さんの話では、松本城三の丸エリアの取組において、丁寧にヒアリングをし、キーマンを押さえ、的確にプランを立て、人を動かしていることが最も印象に残った。
・(有)ハートビートプランが松本市でのまちづくりに対して支援しているような役割を、伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会が果たせればよい。
・新さんの話では、まちづくりのプロセスを変える、まちを高度化するなど、まちづくりがどんな方向に進む場合でも、子どもを含めた住民の声を聞くことが非常に重要だと感じた。
・まちなかエリア高度化WGとして、実際に居心地のよい場所をプレイスメイキングできればよいと思った。

<政金 裕太 氏>

・トークセッションでファシリテーターを務めた。園田さんや新さんのような中間支援的な立場での動きなどとても参考になる話をたくさんお聞きできたが、実際にイベントをしたり動いている人たちがどういうプロセスでそこに至ったかという話を、もっと引き出せればよかった。
・松本城三の丸エリアでは、各界隈の取組をリーダー・サブリーダーが引っ張り、行政が支援している。おそらくリーダー・サブリーダーは、元々活動的でまちの動きに敏感な方だと思うが、そういった方々がもっと動きやすくなるにはどうしたらよいかをもっと深掘りできればよかった。
・まちなかエリア高度化WGはリビングラボであるという話があるとおり、これから社会実験をどんどんやっていくフェーズだと思っている。
・「やりたい」人をプレゼン大会等で募って、数値目標等をカッチリ定めずに、とりあえずやってみる、トライアンドエラーで社会実験を繰り返すというのは、まちなかエリア高度化WGの一つのやり方としてあると思う。

WGメンバーコメント

＜織井邦明企画政策課長＞

・講師お二方から具体的な事例のお話をいただき大変参考になった。特に行政の立場で「やりたい」を実現させるための支援体制を一歩前に進めていかなければならないと感じた。
・また、取組当初は行政が支援したとしても、支援し続けるのは難しいため、まちづくりの取組が持続可能となるような体制を構築するために、最初の段階でしっかりとした設計をしていく必要があり、その役割は行政側にもあると感じた。
・午前中の講師お二方とのまち歩きを通して、あらためて空き地を活用できればと感じた。また小沢川の上流左岸に車が通らないスペースがあり、小沢川を絡めて活用ができるとよい場所になるのではないかと感じた。

＜有賀慎企画政策課長補佐＞

・「対話・つながり・実現の場」のような場になかなか参加できない皆さんの意見も引き出せる場があるとよい。
・「対話・つながり・実現の場」にせっかく集まったのだから何かを成し遂げたい。そのためのスモールステップが大事であるという話がされ、例えば旧ニシザワスーパーの建物活用や、セントラルパークでビアガーデンを開催して、そこで語ってみたいといった意見が出された。 具体的なアクションに向けて市民の皆さんにアイデアを募ってプレゼンをしてもらうのは面白いと思う。

＜村田和也新産業技術推進係長＞

・ヒアリングやデータの重要性を具体的事例でお聴きでき非常に参考になった。
・知らなかった人同士が知り合って、お互いの考えを話して、聴いて、つながることの重要性もお聴きした。「対話・つながり・実現の場」は継続して開催していく必要があると感じた。
・一方で、このWGとして、何か「やりたい」がある人を深掘りしてヒアリングするというようなことはしてこなかった。我々がキーパーソンとなりうる人のことをもっと知る必要があると感じた。
・市民の方の「やりたい」を表に出していく機会を作っていくことも大切であるとの話もあった。次の具体的アクションを起こすフエーズに向けてキーパーソンとなりうる人を見つける意味でも必要なことであると感じた。

会場の様子

会場の様子

会場の様子